

---

DoubleArts 『KISS&KISS』

マヨラー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Double Arts『KISS&amp;KISS』

### 【コード】

N9800G

### 【作者名】

マヨラー

### 【あらすじ】

伝えたい想い。伝えられない私。それでもあの時、君は優しいキスをくれたんだ……。

…これは、感動の協会本部到着から、一ヶ月が過ぎようとしていた頃のお話。

あの感動が嘘のように、私達二人の心は冷めていた。  
…喧嘩、しちゃったんだ。

…トロイ克服の為の研究は、かなり順調に進んでいた。  
まだ、完全にトロイを消し去る薬は出来ていなかったが、一時的にトロイを抑え込む薬が出来上がっていた。  
完全な薬も、もう一歩で完成するらしい。

研究が順調な傍らで、私とキリさんの間の空気は、次第にピリピリ感が増してくる。

二人とも、些細な事で言い争いになってしまふ。  
…それで昨日、少し喧嘩をしまったのだ。

「……………」  
「……………」

協会本部内の、二人の為に用意された部屋の中に二人はいた。  
二人とも、何も喋らない。

部屋で聞こえる音といえば、不機嫌そうにキリさんが溜め息をつく音ぐらいであった。

「エルーってさ、意外と意地っ張りだよな。」

仲直りでもしようと思ったのか、キリさんが突然口を開いた。

「…キリさん程じゃないです。」

無愛想にも、わたしは棒読みで答えた。

キリさんの言う通り、私は意地っ張りなのだ。

…本当は仲直りしたかったのだが、こちらからは絶対に謝らないと、つまらない意地を張っていたのだ。

「……………」

冷たい私の反応を聞いたキリさんはまた、ハアーツ、と溜め息をついた。

「…ちよつと気分転換でもするか。」

キリさんが呟いた。

「…え？」

と私がキリさんの方を向いた時、いきなりキリさんが私をベッドに倒し込んだ。

ベッドに倒し込まれた私の上に、キリさんが覆い被さるように乗っかってきた。

「え！？ちよつとお！気分転換って……………」

私が、変な事でもされるのかと想像していると、キリさんは自分のポケットに手をつ突っ込んだ。

そのポケットの中から、何か白い粒のような物を取り出すと、それを私の口に無理矢理入れた。

「………！！」

抵抗する私の顎を無理矢理動かし、その粒を強制的に飲み込ませた。キリさんは、いきなり私から手を離れた。彼の体と私の体は、どこも触れていない。……発作は……起きない。

「開発途中の抗トロイ薬だ。これで5時間はトロイを抑えられる。」私の顔を見ないでそう言ったキリさんは、体を起こして部屋の出口であるドアに向かって歩き出した。ドアを開けた彼は、部屋を出る前に私の顔を見て言った。

「……あなたが発作を起こす前には帰る。」

それだけ言うと、彼は部屋を後にした。

……久しぶりに”あなた”って呼ばれた気がした。

……久しぶりに彼の眼を見た気がした。

久しぶりに見た彼の眼は、以前のように優しく温かい眼ではなく、冷めた冷たい眼に見えた。

……悲しくなった。

長旅で築き上げた二人の関係は、こつこつ簡単に崩れてしまうものな

のか…

…涙が溢れた。

…キリさんが悪いんだ。

正直、私がこの頃イライラしてるのは、私が悩んでるからだ。

そして、その悩みの元凶はキリさんだった。

キリさんを見てみると、心が揺さぶられる。

また、その気持ちを伝えられない自分にも、イライラしていた。

「ハアーツ……。」

涙を拭って、大きく深呼吸してみた。

少し気持ちが落ち着いていた。

4時間後…

「キリさん、今何してるんだろっ…」

何だか急に、もうキリさんが戻って来ないような気がした。

…やっぱり、私が悪いんだ。

ふと、そう思った。

私にキリさんを好きになっちゃったのがいけないんだ。

そもそも、私がキリさんと一緒に行動していたのは、無事にキリさんを協会本部まで届けるといって”任務”があったからだ。

その任務中に、私が勝手に私情を持ち込んでしまった。

「キリさんにとってみれば、いきなり私と共に行動することを”強制”させられたのだ。」

「……本当は、迷惑なだけだったかもしれない。」

それに、立場も違いすぎる。

私は、トロイに感染した、ただのシスターだ。

キリさんは、世界の希望……フレアの力を持った、世界の救世主だ。

「……好きになつては、いけなかったのかな……？」

「……ドクン……！！」

「うつ！？……！！！」

これは……！発作！？

まだ30分は大丈夫なはずなのに……！

「……キ……リさん……。」

彼は恐らく、まだ帰ってこないだろう。

「……このまま消えてしまつても、いいかもしれない……。  
私の指命は終わった。」

生きていても、キリさんに無駄な心配をかけるだけだ。  
キリさんに無駄な迷惑をかけるだけだ。

それに、私にはキリさんの事を忘れて生きていく事なんて出来ない。  
叶わない恋なら…もういつそのこと消えてしまった方がいいかもし  
れない……。

立っていられなくなった。

私は、その場にバタンと倒れ込んだ。

…寒い。

……意識が遠退く……。

………私はただ、静かに目を閉じた。

「ガチャン」

突然ドアが開く音がした。

キリさんが戻って来たようだ。

「帰ったぞー、エルー。」

……もう帰ってきたんだ、キリさん。  
遠退く意識の中でぼんやり考えた。

「エルー？」

キリさんが私の事を探している。

…もういいんです、キリさん。

その時、彼が私の事を見つけた。

「……！！大丈夫か！？エルー！！」

彼が私の元に駆け寄ってきて、首筋に触れた。透明になりかけていた私の体が元に戻り、同時に息が出来ないような苦しみも消え去った。

目を開けると、キリさんが心配そうに私の顔を覗き込んでいた。

「大丈夫か、エルー？」

キリさんは、そう聞きながら私を立ち上がらせた。

「……………」

離してください。  
もういいんです。

そんな事を言おうとしたけど、キリさんに見つめられて、言葉が出なくなった。

温かく、優しい眼だった。その紅眼は、何度も私を救ってくれた、あの眼だった。

やっぱり、私はキリさんの事が好きだ。  
でも、きっとそれは許されない事だ。

複雑な気持ちが私の中を駆け巡り、訳が分からなくなってしまった。

仕舞いには無惨にも私は、キリさんの目の前で泣いてしまった。

「オイ！？どうしたんだよ？」  
キリさんが更に心配そうに見つめる。

「……………」

…答えられない。

なんでもありません。って消えそうな声で言った。  
でも、涙は拭いても拭いても、次から次へポロポロとこぼれ落ちる。

「どうしたんだよ？言ってみろって。」  
今度は落ち着いて、優しく言った。

「……………言っちゃ駄目なんです……………」

泣きながら、私が言う。

「…伝えちゃ駄目なんです！！……………だってキリさ……………」

私が言い終わる前に、突然キリさんは私の事を抱き寄せると、そのまま私の頭を押さえて口付けしてきた。

「……………！！！？……………」

突然過ぎる事に驚きながらも、私はキリさん押し返そうとした。

「……………！！……………」

が、キリさんに力で勝てるはずもなくいつの間にか私は、キリさん

に身を任せていた。

キリさんの舌が私の中に入ってくる。

私は肩の力を抜いて、されるがままになった。

…息が苦しくなってきた。

キリさんの肩を二回叩くと、やっと彼は口を離してくれた。

「もう泣くなよ？」

キリさんが私の眼を見つめながら言った。

…私は恥ずかしくて眼を合わせられなかった。

「で？何を伝えちゃいけないんだ？」

私はまだ言うのを躊躇っている。

「…言えつて。言わないと、今度は窒息するまでキスするぞ？」

「……じゃあ……。」

私が眼線を逸らしながら言った。

「言ったら、もう一回キスして下さい。」

「は？」

キリさんが戸惑ってるのをよそに、私は言った。

「…キリさんの事が好きなんです。」

今度は眼を合わせながら言えた。  
相変わらず私の顔は真っ赤に火照ってたけど…。

私は大きく息を吸うと、今度は私の方から無理矢理口を付けた。

「……！！!?」

キリさんは驚きながらも、私を優しく受け止めてくれた。

キリさんは息が苦しくなったのか、私の肩を叩いた。  
でも、離してあげなかった。

さつき無理矢理口付けしてきた仕返した。

キリさんが本気でヤバそうなので、やっと私は彼を解放した。

ハア、ハア、と肩で息をしながら、彼は言った。

「…俺も好きだ。エルー。」

珍しく、キリさんの顔が赤くなっていた。

…さつきキリさんに、もう泣くなよと言われたばかりなのに…  
ごめんなさい、また涙が出てきちゃいました。

「ホント、エルーは泣き虫だな？」

「キリさんが泣かせてるんじゃないですか…。」

私が笑い泣きしながら答えた。

キリさんが微笑みながら言う。

「嬉し泣きなら、何度でも泣かせてやるよ。これからも、な。」

キリさんの”これからも”という言葉聞いて、すごく安心したんだ。

でも、確かめたくて…一応聞いてみた。

「ねえ、キリさん。私達、これからもずっと一緒ですよね…?」

私は彼の手をギュツと握った。

キリさんも、私の手を強く、優しく握ってくれた。

「ああ。俺、もう絶対にエルーを離さないから。ずっと大切にするから。」

二人は見つめ合うと、もう一度、口を重ねた。

…それから、私達二人はこの”今”に至るまで、ずっと一緒にいる。

付き合ってもいない。

結婚式を挙げた訳でもない。

それでも一緒にいる。  
子供もいる。

ただ愛してる人の傍で、いつまでも笑っていられる。  
きっとそれが一番大事な事なんだ。

さて、私もそろそろ彼の手を握りたくなってきたので、このお話も  
終わりにしましょう。

私達が協会本部に到着してから、1ヶ月後のお話でした。

…… e n d .

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9800g/>

---

DoubleArts 『KISS&KISS』

2010年10月10日02時32分発行